



プロの背中

2日間で71人手術行脚

なつて……。子供たちに向けた笑顔はまぶしいほどだった。中国国境から南はメコン川下流域まで、1回の移動距離が2000キロに及ぶこともある。

ベトナムでの無償医療活動に取り組む眼科医、服部匡志(47)は、辺境地域への「手術行脚」にも力を入れている。眼科医不在で、高齢者は失明するものと信じ込んでいる人がいる村々。4年前、そこで服部は、医師冥利に尽きる体験をした。

海を渡る赤ひげ ④



助手から水を飲ませてもらう服部さん。ぶつ通しの手術で休憩する余裕もない(3月、ベトナム北部バンドンで)

ご感想を、〒530・8551 (住所不要) 読売新聞大阪本社社会部へお寄せください。ファクスは06・6361・0733、メールはosaka2@yomiuri.comです。

3月の滞在中も11日から2日間の日程で北部海岸沿いのバンドンを訪ねた。首都・ハノイから車で5時間半。村の病院は、近隣から集まった白内障患者71人と家族でこつた返していた。服部は手術内容を間違わないよう、カルテの番号を患者の額にフェルトペンで書いていく。まるで野戦病院のような雰囲気だ。

午後1時、手術が始まった。服部はまず、見習いのため同行しているベトナム人医師に任せ、だが、ほどなく出血させてしまい、バトンタッチ。半日で30人の手術を済ませた。

12日朝、服部は病室を回り、前日に手術した患者を診た。2人で1台のベッドを使う窮屈さ。患者の1人が顔を上げた。「見える。よく見える」と喜び、服部の手を握って離さない。4年前の女性の笑顔が脳裏によみがえり、服部は思った。

「こんな笑顔を、もっと、もっと増やさないかん」

2日目も多難だった。午後に入って手術機械が一時故障。さらに、予告なく別の外科手術が入り、その間、眼科手術は中断させられてしまった。

だが、服部は落ち着いていた。「回り道してもあきらめなければ、何とかなる」。ベトナム人医師らと協力し、夜までかかって残り41人の手術を何とか終えた。手術後にのぞいた病室には笑顔があふれていた。

後片づけをしながら、服部はもう、来月の手術行脚の段取りを考えていた。11日の手術中、小耳に挟んだ日本の地震が空前の被害を広げていることは、まだ知らなかった。(敬称略)